



廟の周りを廻って家族の幸せを祈るチベットの女性たち(本文10p参照)

四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川 健三

#### ‘わんりい’150号の主な目次

北京雑感(41)「打包と量り売り」	2
私の調べた四字熟語(39)「天地開闢」	3
媛媛讲故事(20)「牛郎と織女の伝説Ⅱ」	4
湖南省への旅(1)「中国の大学で講義をする」	6
湖南省への旅(2)「学生達との交流風景」	8
四姑娘山・写真だより(20)「女王谷の正月風景」	10
アジアを読む(63)	11
土の香りのモダンアート・農民画(6)	12
1月の歌「故郷」歌詞	12
アフリカとの出会い(39)「早すぎる永遠の別れ」	13
スリランカ紹介(35)「ジャフナ珍道中Ⅹ」	14
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	15
私の四川省 一人旅(32) 亜丁18	16
特別企画・春節ミニコンサート	18
‘わんりい’活動報告・クリスマスライブ参加	19
‘わんりい’掲示板	20

♪♪「中国語で歌おう!会」1月の歌 ♪♪

#### 歌い継がれ、誰でも知っている文部省唱歌

ふるさと  
**〈故郷〉** (歌詞 12p)

作词 高野辰之 作曲 岡野貞一

\*‘わんりい’新年会で皆で歌いましょう!

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、  
 小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

● 1月29日(金) 19:00~20:30

指導: zhào fèng yīng  
**趙鳳英 (中国人歌手)**

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

● 参加費: 1500円(体験無料)

● 「中国語で歌おう!会」2月の講座日: 2月19日(金)

\*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局  
 (☎042-734-5100)へお問合せ下さい。

参加費: 1500円(体験無料)

先日、日本の飲食店で供される調理食品のうち20%が廃棄されていると言うことをテレビのニュースで知りました。この廃棄量を減らすために、ある市では飲食店に盛り付け量の少ないメニューの開発を依頼し、市民には残した食べ物を持ち帰るためのドギーバッグを無料で提供し始めたそうです。このドギーバッグ、アメリカではよく使いましたし、中国でも、2000年頃は始まったばかりのようでしたが、2,3年のうちにすっかり定着したようで、私もしばしば利用しました。

食事が終わってから「<sup>ダーバオ</sup>打包」と言うと、服务员はサッと発泡スチロール製で蓋と身が一体の容器を持ってきて詰めてくれます。何種類も残っている時は、どれが必要か聞かれます。勿論、全部持ち帰って良いのですが、気を付けていないと2,3種類一緒に詰められてしまいます。乾いたものならそれでいいのですが、とろみのついたトマト味のものも、塩味の炒め物と一緒に詰めようとするので、慌てて停めて、別々にして欲しいと頼むことが度々ありました。

一度、近くのレストランで、スープがとても美味しかったのに沢山残ってしまって、お店の人にどうにか出来ないかと相談しました。家の近くで、かなり頻繁に行く店なので、器を借りて帰りたいと思ったのですが、服务员は「<sup>メイウエンチー</sup>没问题（問題ない）」と言って、何とビニール袋にざあーと移して持たせてくれました。スープでたばたぼするビニール袋をぶら下げて、複雑な思いで家路を辿りました。

また別の時、北京で有名な骨付き羊肉の水煮鍋のお店に行ったのですが、ここはスープ（<sup>ヤージン</sup>煮汁）の持帰りに対応して、直径15センチ程のプラスチック製バケツを貸してくれました。ただしその保証金（<sup>ヤージン</sup>押金）が5元でした。貸してくれるバケツは、外で買えば1元もしないようなもので、5元は随分高いのですが、返しに行けば全額払い戻してくれるので、バケツの使用量は只なのです。然しながら、徒歩圏内ならいざ知らず、5元のために態々車やバスで出かけるのは面倒なので返しには行かず、結局5元のバケツを買うことになってしまうのです。帰り道では、皆、この保証金額設定の妙に感心しきりでした。

中国では、昔から宴会の料理が残らないと主人の顔がつぶれると言ったそうですが、今でもその名残はあるようで、公式の宴会などでは料理がいっぱい残って、とてももったいないと思うことが間々有りました。格式の高い食事でも、老北京飯館（固有名詞ではありません）といわれる北京の庶民料理を供するお店で食事をす

ると、食べ残しが多いのにびっくりします。老北京飯館と呼ばれるような、昔ながらの北京の庶民料理を供するお店では、店員さんは全員男性、民国時代のような帽子と服を着て、客が来ると大きな声で迎え、店員さん同士も大きな声を掛け合いながらテーブルの間を駆け回り、うるさいくらい賑やかです。この種のお店は賑やかなのに加えて、テーブルが小さく、椅子も木を渡しただけの二人用ベンチですから落ち着かないのですが、そこに身を置くと、何故か心が浮き立ちます。清朝末期か民国時代を覗いているような面白さも感じます。

このお店で人々は、料理を小さなテーブルにお皿が重なるほど注文して、最後に名物の<sup>ジャージアンメン</sup>炸醬麵（肉味噌麵）を注文します。その前に沢山料理を頂いているので、炸醬麵が来る頃にはお腹が一杯で、麵は美味しいのですが食べられないで残してしまいます。勿体ないと思いながら回りのテーブルを見ると殆どのテーブルで残りものが一杯でした。この類のお店の残飯は特に多いと感じていました。ところが、こんなお店でも「打包」する人が段々増えて来ました。残飯を減らすためには良い取り組みだと思えます。

ところで話は日本のドギーバッグに戻りますが、以前は日本でも食べ残しの持帰りが出来たと思います。それが、何回か食中毒のような事故があって、お店のほうがり用心深くなり、最後には法律で禁止されたように記憶していますがどうでしょうか？

北京では、日本のようにこの「打包」が途中で立ち消えにならないように祈ります。因みに、北京では、家庭で料理した食べ物が日本と比べて長持ちするような気がします。北京が乾燥しているからかな？と勝手に想像しています。

もう一つ北京で変わって欲しくないものは、量り売りの習慣です。これも、以前の日本にはありましたが、今ではデパートの食品売り場で僅かに残り、気の利いたスーパーが最近再開しましたが、一般には殆ど見られなくなりました。北京では、パック売りが増えてきたとはいえ、まだまだ量り売りが主流です。量り売りで品物を買うと、何故か豊かな気分になります。北京の物価が上がるのは仕方が無いとしても、折角人手があるので量り売りは残して欲しいと思いますが、中国の社会情勢が変化すると、今までのような販売形態は難しくなり、日本のように量り売り文化が無くなってしまおうのでしょうか？日本を反面教師として、なくならないように頑張りたいと思います。

「開闢<sup>かいびやく</sup>」という言葉は今では少々馴染みのない言葉になって、若い世代にはルビがなければ読めない言葉になってしまっているのではないかと思います。が、「日本開闢<sup>かいびやく</sup>以来の～」などと新聞や雑誌に書かれているのを目にすることがありませんか。かつては大学の祝賀や記念式典や寺院の由緒を書いた文書等に「本学開闢<sup>かいびやく</sup>以来」とか「当寺の開闢<sup>かいびやく</sup>は」とごく当たり前に使われていました。日本の民謡に「日本開闢<sup>かいびやく</sup>（かいびやく）天の岩戸も 踊りで夜が明けた」<sup>注1</sup> という歌詞があったりもしています。

開闢は詳しくは”天地開闢”が省略された表現のようです。今回はその”天地開闢”をとりあげてみたいと思います。天地がどのようにして出来たのかという中国の神話で、「わんりい」（2008年3月号）に何媛媛さんが書かれた文章と重なりますが、今回は四字熟語のテーマとしてもう一度中国の気宇壮大な神話を楽しんで読んで頂ければと思います。

さて、天地開闢の意味を辞書を調べてみますと、

▲三省堂 大辞林：

「天地開闢：天と地が開けた、世界の始まり。天地は、宇宙の始原における唯一混沌が上下に分離して形成されたとする中国古代の思想に基づく」

▲小学館 中日辞典：

「開天辟地<sup>kāitiānpìdì</sup>：天地開闢。開闢以来、有史以来、生まれて初めて」

と載っています。

この成語の出自は、三国時代呉の徐整の著した中国の古書「三五歴記」の、

「天地混沌如鸡子，盘古生其中，万八千岁，天地开辟，阳清为天，阴浊为地，盘古在其中」の部分です。

（天地は卵の中味の如く混沌としていた、その中で盤古<sup>ばんこ</sup>（天地を分けた者の名）が生まれ、一万八千歳になって天地を開闢し、明るく清浄な部分は天になり、暗く濁った部分は大地となり、盤古はその中間に在った。）私たちの祖先は天地がどのように形成されたのかを大変知りたがっていました。それで彼らは少しずつ天地開闢の神話を作りあげていったのです。

それによれば遠く遠くはるか昔に、未だ天地さえ

も存在していなかったころ、そこはただ混沌としていて、天地の境も縁も、上下左右も東西南北の方向も無く、ただ真ん丸い一個の卵のようであったのです。そのような中で盤古が生まれ育ちました。

盤古は日に一丈背が伸びました。

そうして一万八千年が経って盤古は伸長を極め、成人になりました。

盤古は暗黒のドロドロの状態に我慢できず、両腕を突き出し両足をふんばって掛け声をかけて立ち上がると、卵のように丸いものが破裂し、その中の軽く澄んだものが上へのぼって天となり、重く濁ったものが下方へ沈んで地になりました。

この時から混沌とした丸いものは天と地に分かれたのです。そして盤古も天地を背負うほどの巨人となり、あたかも天地を支える一本の柱のようでありました。そして再び天地が混沌となることはありませんでした。

盤古が天と地を分けてからは彼の気持ちの変化が、直接天地の変化に影響を与えました。彼が嬉しいときは天空は明るく晴れ、彼が悲しんで泣いているときは天空は雨になって、地上に落下した涙は合流して河になり、湖になり、海になりました。

やがて盤古は死にましたが、盤古が死ぬと、その死体の頭は隆起して五岳（東岳泰山を筆頭とした北岳恒山、南岳衡山、西岳華山、中岳嵩山の総称）に、その左目は太陽に、その右目は月に、その血液は海に、その毛髪は草木になったということです。

## ■注記

1) 西馬音内音頭（秋田県羽後町国指定重要民俗文化財）

### 【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

\*紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

天地開闢（てんちかいびやく）

三澤統

私が調べた四字熟語 39

翌日の夕暮れ頃、牛郎は老牛の言うとおりに壁蓮池近くの桃林に行きました。桃林に行ってみますと、確かに桃の実がたわわになっている木があり、その上に、七色の衣が七枚掛<sup>ころも</sup>けられています。牛郎はその中の桃色の衣を外して胸に抱え、林近くの芝生に座って静かに仙女たちが現れるのを待つことにしました。

しばらくすると、遠くから女性達の笑い声が伝わってきました。目を凝らして桃の木の間を透かしてみると、河から上がってきた七人の美しい女性達が、桃の木に掛けてあった自分達の衣を見つけ出して体にまとい、あいついで天に上っていきました。しかし、織姫だけはどうしても自分の衣を見つけ出せず途方にくれています。牛郎は織姫の困り果てた様子を見ていられなくなり織姫の前に出て行きました。



「あなたの衣は俺が預かっている。もし俺の妻になってくれるなら、すぐ返して上げよう」

と牛郎は言いました。

突然、目の前に現れた牛郎に織姫は大変びっくりしました。けれども、牛郎の誠実な顔を見、真面目に心を込めて話すのを聞いているうちに段々頼もしい人だと思えてきました。しかも今は体を覆う衣を纏ってないのです。あまりの恥ずかしさに、織姫は牛郎の申し出に無言で頷いていました。牛郎は織姫に衣を返すと家に連れて行き、二人は一緒に暮らすようになりました。

牛郎からの申し出を受けて一緒に暮らし始めた頃の織姫は、天界でただひたすら織物を織って日を送るよりむしろ人間界で自由に生きる方が良いと思っていました。が、牛郎と一緒に暮らしてい

るうちに段々と牛郎の誠実さ、勤勉さ、優しさなどに感動し、次第に心から牛郎を愛するようになってゆきました。

その後、牛郎は畑仕事をし織姫は家で布を織り、二人は幸せな生活を続けて一年後には可愛い双子の赤ちゃんにも恵まれました。織姫は子ども達を育てながら、機織りを続けると共に周りの女性たちに美しい錦の織り方を教えました。言い伝えでは、織姫は天界から持ってきた蚕の種(卵)も皆に惜しみなく分け与え、蚕の育て方や、糸の取り方を皆に教えたりしましたので、その後まもなく人間界にも色彩の美しい絹織物が広がってきたのだといわれています。

ところが一方天界では、織姫が錦の布を織らなくなりましたので、七色の美しい霞も見られなくなってしまいました。天帝は不思議

に思ってそのわけを西王母に訊ね、織姫が人間界に下り牛郎という人と結婚していることを知らされました。天帝は大層怒って、「それは決して許されることではない。どんな方法でもよいから、織姫を連れ戻せ！」と西王母に強く命じました。

或る日、牛郎は畑仕事に出掛け、織姫は子供たちと家に居ました。西王母は天界の兵士たちを引き連れて、牛郎の家へやって来ると、びっくりした子供たちが声を張り上げて泣き叫ぶのにも耳を貸さず、抵抗する織姫を無理やりに天界へと連れ去って行きました。

牛郎が家に戻って見ると、家には泣いている双子たちだけで織姫の姿がどこにも見当たりません。心配した牛郎は泣き喚く子ども達を連れて老牛のところに行きました。老牛は織姫が天界で天

帝の怒りを買って、閉じ込められてただひたすら織物を織らされるようになったことから始め、これまでのいきさつの全てを語りました。それを聞いた牛郎はがっくりと膝をついて、ただただ天を見詰め「織姫！ 織姫！」と空しく呼びかけるしかありませんでした。

その姿を見た老牛は更に続けて言いました。

「早くわしを殺しなさい。そしてわしの皮を靴にして履きなさい。そうすれば天に登れる」

牛郎は驚きました。

「そういわれてもおれにはとてもできない」

「わしは、十分長く生きましたし、どっちみちこの先もう長くはない。どうせ死ぬなら、今何か役立つことがあればその方がどんなに嬉しいだろう」

と心を込めて牛郎を説得しました。牛郎が決断しかねてぐずぐずためらっていると老牛は更に言葉を続け、

「早く早く！間に合わなくなるぞ！」

と催促しました。牛郎は側で「わーわー」と泣き続ける子供たちを見て決断し、老牛に向って深いお辞儀をすると刀を振り上げました。

牛郎は手厚く老牛を埋葬すると、その皮で手早く靴を作り足を入れると、不思議なことに体は空気よりも軽くなって、そのまま天に上って行くような感じを受けました。牛郎は大急ぎで二人の子ども達をそれぞれ籠に入れ、天秤棒の前後に担うと「お母さんに追いつこう！」と声を掛けると、途端に足は地面を離れてどんどん空高く昇っていききました。

空へ空へと昇っていくうちに、織姫と西王母一行の姿が行く手に見えてきました。二人の子供も母親の姿が見えるようになると「おかあさん！おかあさん！」と声を上げて呼び掛け始めました。

しかし、もう一息というところまで追いついた時、西王母も牛郎たちが追って来るのに気が付いてしまいました。西王母は頭からかんざしを抜き取り、牛郎の前で強く一振りすると、突然滔滔と流れる大きな河が現れ、その河は織姫一行と牛郎親子たちの間をまるで断ち切るかのように目の前に横たわっていました。河は底が見えないほど深く、絶え間なく高い波を打って流れ、牛郎と子ど

も達はなす術なくどうしても渡る事ができませんでした。

織姫は河の向こうに居る夫と子供を目前に見ながら悲痛な声を上げてただ泣くしかなく、子ども達も河のこちら側で必死に「おかあさんー、おかあさんー」と呼び叫ぶばかりでした。

悲嘆にくれる親子の姿を天上の神々たちも目にしました。神々たちは織姫たちのあまりの嘆きように同情し、揃って天帝のもとに行くこと織姫一家への怒りを解いて欲しいと天帝と西王母に心を込めて頼みました。天帝も、西王母も、神々の心からの願いに心を動かされ、七月七日の夜、年に一度だけ織姫と牛郎の家族が出会い一緒に団らんできる日にすることを認めてくれました。

でも、織姫たちの家族は滔滔と流れる河をどうやって渡って会いに行けるのでしょうか？

実は毎年七月七日、世の中のカササギは皆この天の河にやって来、それぞれが広げた翼を連ねて橋となり、織姫はこのカササギの橋を渡って牛郎を訪ねると伝えられています。

橋の名は「鵲橋」と呼ばれ、織姫と牛郎の出会いに欠かせない橋として中国の人々は誰でも知っている言葉です。また、中国には「鵲橋相会」という言葉もあります。織姫家族が、鵲橋を渡って、一年ぶりに一家が会うことから、夫婦や恋人同士が久し振りに会うときなどに使われます。

そして、毎年七月七日の日はどこへいってもカササギの姿を見られないそうです。何故かって分りますよね。この日に、世の中のかささぎは全て織姫一家の出会いのために、天の河へ上って「鵲橋」を作るからだそうです。

#### 【参考】

大伴家持(717/18～785)『万葉集』末期の代表歌人、官人。

「かささぎ鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」(新古今和歌集 小倉百人一首)

上記の歌は、牽牛と織女を渡すという古くからの美しい伝承がある鵲橋を宮中にかかる橋に見立てられ、小倉百人一首で馴染まれています。

‘わんりい’の活動の一環に「‘わんりい’中国語勉強会」という中国語講座があります。そのクラスメート・山口さんは、現在、中国で日本語の先生をしています。学期の終わりや転勤の際などに一カ月ほど帰国し、その際中国語の講座に参加されるのですが、その折に中国へ旅行する時は是非彼女のところに立ち寄って欲しいというお誘いが前々からありました。

少しでも彼女の手助けになればと、2009年11月末、講座の同学の山田さんと私の二人は山口さんが現在勤務している湖南省長沙市に行きました。長沙市は湖南省の省都で人口660万、ビルが林立する大都会です。ちなみに「湖南」省は中国第二の大きさの洞庭湖の南に位置するという意味でつけられた名前です。

羽田から上海虹橋空港に飛び、そこで国内線に乗り継ぎ、出発当日中に長沙に到着する便を確保し、さらに洞庭湖(岳陽楼)、張家界、鳳凰、上海と回り併せて8泊9日の日程としました。そのうち山口さんが勤務している長沙が出发当日を含めて4日間です。

当初、私たちは気軽に学校の休日に立ち寄り、市内観光、バス旅行などで学生たちと交流してみたいというくらいの気軽な気持ちでしたが、山口さんの希望はそれを大幅に上回って、ウィークディの時間中の講義や太巻き寿司をつくる、抹茶の実演などの要望もあり、想定以上の本格的な交流になり、出発前の準備が大変な作業になりました。

私に対する山口さんの希望は学生たちが今最も興味を持っている「日本の企業がどういう人材を必要としているか」というテーマについて講義して欲しい、しかも日本語学科の学生とはいえ日本語を始めたばかりなので、日本語を聞いて理解するのは難しい、中国語で話してほしいという要望です。

中国語での講義は初めてです。しかも日本企業といっても中国にある日本企業という意味でしょう。私は企業人としての職務経験は十二分に積んでおり、人事・労務の経験が長く、最後は系列会社で経営トップとしての経験もあるので日本の企業としての考えは十分承知しているという自負はあります。しかし海外での実務経験はありません。

このテーマは私にとっては少なからず難題でした。幸い中国語講座のメンバーである寺西さんは大連で総経理の経験をお持ちです。意見を求めましたところ、丁寧に文章で答を頂きました。また私の知人、友人で現在中国で部課長として勤務している人達からもアドバイスを頂

きました。また数名の中国人からも日中の考え方の違いについて多くのヒントを頂き、これらと私の個人的な意見を組み合わせる内容梗概を作成し、パワーポイントの資料にまとめました。パワーポイントの機能を使って漢字の資料を次から次へとプロジェクターで見せれば、十分理解してもらえるのではないかと考えました。とはいえ講義の原稿も万全のものにしておく必要があります。中国語講座の郁先生にもかなりの長文の原稿のチェックをお願いしました。

しかし、次から次へと修正やら追加が必要となり、やっと最終的原稿が出来上がったのは出発の前日でした。特に発音が心配になり、出発前日の中国語講座を途中休憩の時間に抜け出し、町田から都心に通っている知人の中国人に鶴川駅で途中下車してもらい、駅前に停めた私の車の中で吹き込んだテープをもとに二時間に亘る個人レッスンを受けました。翌日は朝6時自宅出発というのに終わったのは前日夜10時半になっていました。まさに泥縄式です。しかし、やっと自信らしきものが湧いてきました。

山口さんの勤務する学校は省立の「長沙職業技術学院」、創立23年の歴史があり、広大な敷地に学生数17,000名、中国で「学院」とは単科大学の意味であり、三年で修了します。日本でいえば大学と短大の間くらいの大学でしょうか。夜間や土曜日の授業もあり、三年間で四年間の内容にちかい授業が受けられるようになっています。12の学部があり、民政、社会事業、経済貿易、ソフトウェア、電子通信、芸術設計、外国語、リハビリ、体育、心理などがありますが、他の大学にない最大の特徴は葬儀についての学部があることです、この敷地が元は広大な墓場だったと聞き、納得できる気がしました。交流の対象は外国語学部の日本語学科で山口さんが担当する二年生は2クラス計110名という事でした。

夕方6時前、ホテルにチェックインを済ますと荷物の整理もそこそこに翌日必要な道具と食材を携えて、大学に向かいました。ホテルからタクシーで約30分位です。敷地の一番奥にある外国人講師用の建物にある山口さんの居室(2LDKーリビングは学生たちも訪問できるようにかなり広い作りになっています)や翌日使う教室を見せてもらいました。

教室は9時まで夜間の授業が行われていました。階段式教室で立派なパソコン、プロジェクターとマイクが備えられています。黒板はありますが、あまり使われていません。9時に授業が終わるのを待って、教室のパソコンに持参したソフト(マイクロソフト・ワードとパワーポイ



講義風景

ントおよび今回の資料であるパワーポイントのCD)をインストールしました。教室やパソコンに鍵をかけるためやってきた用務員さんを待たせての作業となりました。

さて、翌日私は前日インストールしたパワーポイントの資料で修正したい箇所があるので、午後2時過ぎからという講義ですが、一足早く2時10分前に教室に行きました。まだ昼休みで(昼休みは2時間)、50名位の学生たちがパソコンを利用してDVDで音楽と動画を楽しんでいます。私が行くとすぐパソコンの席を譲ってくれました。

ところがパソコンで昨日インストールした資料を探したのですが見当たりません。昨晚私が30分かけてインストールしたソフトはすべて削除されています。どうしてなのか理由はわかりませんが、いささか慌てました。

もう一度最初からやり直します。日本から持参したマイクロソフトのワードとパワーポイントは文字化け防止のためです。私のCDの内容修正の時間など全くなりました。少し早めに教室に来たのが幸いしました。中国では何が起るか予測がつかないという印象をこのとき更に強くしました。

午後2時過ぎから授業開始です。110名の日本語学科の学生の内90%が女子学生です。最初に山口さんに紹介されて山田さんが挨拶に立ちました。パソコンで

「ENTER」を押すと山田賀世さんの氏名がプロジェクトに映し出されるように設定しておきました。

山田さんは日本語で挨拶されたあと中国語で話をされましたが、川崎の市議員を務められただけあって堂々とした挨拶です。皆さんとの交流を楽しみにしてきたという人柄がにじみ出て、また寿司とお茶の先生を務めますという挨拶で、盛大な歓声があがりました。

次は私の番です。自己紹介に続いて、「日本企業需要什么样的人材」というテーマで最初から最後まで中国語で話しました。約45分位ゆっくり話しました。できるだけ中国語の成語(格言)を活用し、わかりやすく話しました。

たとえば、「知己知彼 百戦不殆」(己を知り敵を知れば百戦危うからず)これは日本企業の要求内容を知り、自らの現状と比較すれば、各自のこれからの具体的な努力目標が明らかになるだろうという意味で使いましたし、また「三個臭皮匠頂個諸葛亮」(三人寄れば文殊の知恵)は協調性が日本企業では特に必要というところで使いました。

その他実際に日本企業で中国人技術者が引き起こした協調性を損なう事例を紹介して学生たちに意見を求めました。また「三人行必有我師」(三人いればその中に必ず師とするに足る人物がいる:吉川英治はこの言葉を自分流に変えて「人皆吾師」といっています)という孔子の言葉は向上心のところで使いました。日本語の会話力の必要性やサービス態度、時間厳守や最後までやりぬく責任感、社会道徳、5S(整理、整頓、清潔、清掃、躰)、情報の企業内共有化(中国人は私の知る限り自ら知りえた情報は自分のものとして他の人に教えない傾向がある)などを簡潔に話しました。最後に日中のGDP(国内総生産)の比較、また、大学卒業生の就職難の最新の日中の新聞記事を紹介し、厳しい現実を十分再認識するよう強調しました。

活発な質問がありました。極力中国語で答えましたが、日本語になっていたところもあったことでしょう。質疑応答が30分間続きました。

こういうハプニングもありました。長沙の南の方の、毛沢東の出身地の近くから来た男子学生が、質問に立ちました。「なまりがひどかった」と伝えられる毛沢東と出身地が同じところだそうですが彼も「なまり」がひどく私には全く聞き取れません。すると隣の女子学生がさっと立って標準語で通訳をしてくれました。質問した男子学生には申し訳なかったのですが、この場面では思わず一同で笑ってしまいました。

話と質問の時間が終わり残りの30分間を使って、学生たちは感想文と質問をメモにまとめました。それは今私の手元にあります。質問にはまとめて回答をしたいと思っています。

この後、太巻きと抹茶の交流会、学生達と洞庭湖へのバス旅行が続きます。その話は次ページをお読みください。

◎「太巻き」と「抹茶」で交流

山口さんから太巻きの講習会と茶席の希望を聞かされた中国語講座の同学・山田さんの方の事前の準備は私に比べたらもっと大変だったかもしれません。寿司を作るのにまずは米から用意しなくてはなりません。日本米・3kgを持ってゆくことになりました。また中国の黒酢では美味しい寿司にならないそうですので日本の酢が必要ですし、海苔や簀子(すこの)も用意しなければなりません。茶席のためには茶うけのお菓子を150個用意する必要がある上に茶筴や抹茶茶わんも用意の必要があります。特に茶わん四個は破損の心配もあるので、手持ちで持参ということになりました。

私の講義が終わると巻き寿司講習の時間です。30名の学生が一度に山口さんの居室に詰めかけました。山田さんは私の講義の途中で席を外し、ご飯を炊いたり、卵を焼いたりなどで大忙しだったようですが、流石に30名分の巻き寿司はいっぺんには作れません。半分ずつに分けて指導しながら作ることにしました。

日本のご飯と酢で作る巻き寿司は中国ではなかなか味わえないものです。最近中国の大都市では日本式の回転すし屋が進出していますが、米は中国のものでパサパサしています。すこしもち米を加えてなんとか寿司の形をしていますが、本物とはほど遠いものです。この長沙で本物の巻き寿司を味わえることができるのですから参加した学生たちは大喜びでした。

無事太巻きの講習会の終わった後は、抹茶の実演です。場所を図書館の喫茶室に移して山田さんと山口さんによる日本式の茶道の講習です。この図書館は5階建ての大きな建物で、その屋上に中国風の雰囲気醸し出した茶館が設置されており、落ち着いた雰囲気があります。



太巻き講習会 手前右が山田さん



完成した太巻を手にニコニコ顔の学生達

茶筴でかきまぜるところから始めましたが、学生達は初めての体験でなかなかうまくゆきません。それでも後半はどうか慣れて茶わんの持ち方までも堂に入ってきました。

抹茶は苦いので中国の人たちにはどうかと私は心配していたのですが、山田さんはあまり苦くない抹茶を選んで持ってこられたそうで、お茶うけの砂糖を固めた菓子も甘くてなかなか好評でした。

洞庭湖（岳陽楼）へのバス旅行

11月27日（金）洞庭湖といえば杜甫や李白等がのぼり後世に残る詞（詩）を書いたところであり、江南三大名楼の一つに数えられる岳陽楼へ、チャーターしたバスで学生27名と山口さん、山田さん、私と併せて30名で行きました。朝9時に学校を出発、夕方6時に帰着予定です。当日はあいにくの曇り空で洞庭湖はかすんでいて遠くまでは見ることはできませんでした。

- 洞庭湖は長江につながっており、三国志の時代、呉の將軍・魯肅はここで水軍を訓練したといわれて



抹茶の道具を前に興味津々の学生達

いますが、全体の状況を視察するために楼を建てた(215年)のが岳陽楼のはじまりとされています。宋の時代岳陽楼が再建されたのを記念して範仲淹(当時の文学家、政治家、軍事家)が368文字からなる岳陽楼記を書き送りました。この文の中で有名なのが「天下の憂いに先立って憂い、天下の楽しみの上に楽しむ」即ち後に有名となる、「先憂後楽」が最初に書かれた文章です。岳陽楼は時代とともに建て替えられました。唐、宋、元、明、清の五朝のそれぞれの岳陽楼の1/10位の銅製のミニチュアがあります(五朝楼観)。

上記の岳陽楼の歴史は参加した学生の一人がインターネットで調べて私に教えてくれました。

往復8時間強の間、学生達が入れ替わり立ち替わり質問に来て私達は休む間もありませんでした。日本語を勉強するようになった動機についてこちらからも質問しましたが、あまりはっきりした答えが返ってきません。学生の多くはどれも日本のアニメがきっかけで日本に興味を持ったようです。ドラエモン(機器猫)は中国でも有名です。日本のアニメも国際親善に役買っているのを再確認させられました。

また、なかに「卒業したら事業を起こそうと思っていますが先生はどう思われますか?」という質問がありました。中国の現状と問題点について私の個人的な考えを述べ、ビジネスチャンスは大いにあると励ましておきました。

学校に到着後の当日の夕食は学生食堂で参加した学生たちに御馳走になり賑やかな夕ご飯を楽しみました。そして長沙市内の観光

11月28日(土)は市内観光です。まずは湖南省博物館です。市内で発見された馬王堆漢墓から発見された文化財が展示されています。特に前漢時代の女性のミイラは保存状態が良く、発見当時は皮膚に弾力性があり、関節も動いたほどだといわれています。当日参加者は学生5名と我々(山口、山田、岡村)を併せて8名です。この博物館は入場料が無料のため、また文化財の保護のため入場者数を制限しているため9:00開館というのに8:30から入場希望者が長蛇の列をつくっています。当日は雨の中、学生たちが早めに来て並んで順番を確保してくれました。この陵墓の棺桶の構造には目を見張る工夫が施されています。

次に湖南大学の構内にある中国四大書院の一つ岳麓書院を見学し、ついでに昼食は湖南大学の学生食堂を利用しました。すべてカード決済となっているので、湖南大学生のカードを利用させてもらい、8人併せて20元(300円弱)と破格の安さです。



賑やかなバスの車内



五朝楼観を背景に記念撮影

最後は市の繁華街の中心にある天心公園に行きました。この楼閣からは市内が一望できます。茶館で点心とお茶を賞味しながら中国語と日本語入り混ぜのおしゃべりに興じました。これで長沙の日程はすべて終了し、午後4時頃山口さんや学生たちに別れを告げ、我々は次の目的地「張家界」を目指しホテル経由で空港に向かいました。

いつもの旅行よりも数倍疲れましたが、学生たちと十分交流が図れたという達成感もあり、強烈な印象が心に残る旅となりました。(つづく)



茶館で中国茶を楽しむ山口同学(右端)と学生達

女王谷にある丹巴(注1)の山奥の正月(農業暦)を見ていると50年前の日本の農村にあったような和んだ伝統的な風情を思い出して懐かしい気分になります。それは自然に調和した豊かな生活様式があってこそ可能になるものだと思います(注2)。

大晦日から正月初日と2日目に掛けてはほとんど家でのんびり過ごし、大好きな肉料理や羽根蹴り等を楽しみます(写真1)。また正月初日には平屋根の一面に在る烽火台で芳しい柏木の葉を焚きながら法螺貝を吹き鳴らし、囲炉裏でも柏木の葉を焚いて家を清めます。

正月3日目になると集落の近くにある廟に老いも若きも集まって正月を祝い合い(写真2)、古くからのボン教の作法で豊作と平安を祈り(写真3)廟の周りを左周りに廻りながら(チベット仏教は右廻り)家族の幸せを念じます(表紙写真参照)。その後数日間は親戚を挨拶廻りしたり村の寄り合いで綱引き(写真5)等を楽しみますが、そんな時は子供達も集まって来て仲良さそうにトランプ等に興じる姿(写真6)が見られます。



写真1 中国伝統の遊び、羽根蹴り(毬子(jiǎnziジェンズ))を楽しみます。額に塗られた赤い色は潰した鶏の血です。これは「第三の目」で幸運をもたらすと言われてます(注3)。

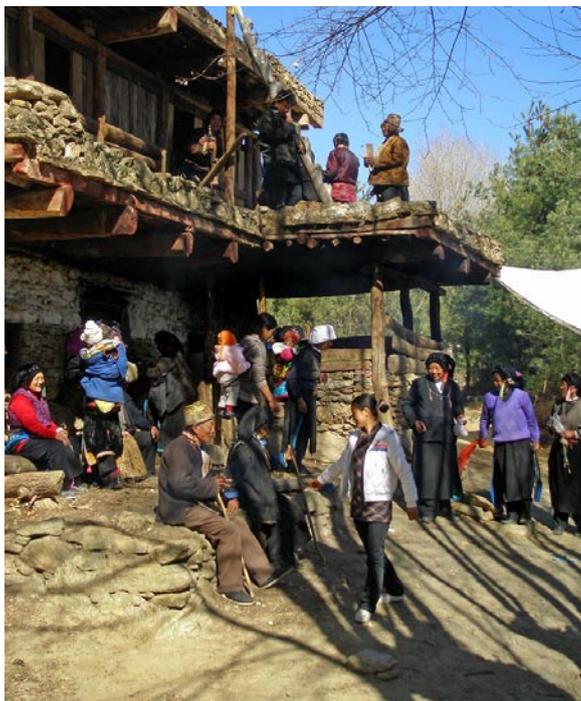


写真2 集まって正月を祝う



写真3 古くからのボン教の作法で豊作と平安を祈ります

■注記

- 1)「地球の歩き方 成都・九寨溝・麗江 09-10」P94～101に四姑娘山が掲載されていますが、隣接する見所の一つとして丹巴が追加されました。
- 2) この点で同じ女王谷の四姑娘山麓の集落は、観光開発の進展とほとんどの農地を政府へ売却した事、それに地震で壊れた家を現代風に改築した事が重なり、金銭への依存が大きい生活様式に変わりました。また丹巴でも、観光開発が進んだ一部地域では昔の人情味が薄れて金銭への依存が大きい生活様式に変わりました。情報化が進んだ今日では他と隔絶した伝統的生活を維持する事が難しく、当地の生活様式も徐々に変質しつつあります。
- 3) 潰した鶏の血を額に塗る習慣は、今ではほとんど絶えた鳥占術の作法(隋書の女国伝や唐書の東女国伝等に記載されています)に関わっているかも知れません。「第三の目」はボン教やボン教起源のチベット仏教の神像に描かれています。古代ボン教に関わりを持つヒンズー教の文化圏でも見られます。「第三の目」の開眼はボン教やチベット仏教の法主の重要な修行の一つです。



写真5 村の寄り合いで綱引き



写真6 子供達も集まって来て仲良くトランプ等に興じる

- ‘わりい’ニュースレターに掲載済みの「写真便り」はこちらにあります  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>
- 大川さんのホームページはこちら 四姑娘山紹介  
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>  
 女王谷紹介  
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvally.htm>
- わんりいメンバー他で四姑娘地区を訪問したときの記録 (河本義宣氏作成)  
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>

アジアを読む (63)

絶望から出発しよう

宮台真司著 (株)ウェイツ



新年から、「絶望から出発」というタイトルの本で、すみません。著者の社会学者曰く、私たちは社会に対する「ヌルイ絶望」によって、なにも考えることなく現状に甘んじている。「現状への失望なくして、僕たちは抜本的なシステム改革への動機づけを手にすることはない」。

社会の問題点を、著者はひっきりなしに述べる。「相手を特定方向に動機づける」「表現」と単に「言いたいことを言い、叫びたいことを叫んでスッキリする」「表出」の区別がつかない「政治コミュニケーション」。「相手から必要な反応を引き出す駆け引きの場」であるはずの外交を「言うべきことを言う場所」だと捉えている人々。法律に縛られるにもかかわらず、「法律文書リテラシー(リテラシー=能力)」が欠けているために、その法律に

縛られる側の私たちが狙いを見抜けず、法案がどんどん通っていく国会。などなど。

なぜ、そのようになっているのか、原因は多くある。公立高校でエリート教育をやめてしまったがゆえに、富裕層しか東京大学にいけなくなってしまい、人材が枯渇していること。既得権益を守るために新規参入が難しいマスコミは、いつしか「政治家や官僚の言うことを官報よろしく垂れ流すもの」となり、国民の「知る権利」を阻害していること。「政府—銀行—融資先」の三位一体により、お金の流れが市場にまかされていないこと。などなど。

しかし、私たちは、テレビを見ながら漠然とした不安に襲われつつも、そのようなことは意識せず、なんとなく生きている。それが、おそらく「ヌルイ失望」。失望が「ヌルイ」からこそ、社会に対して特にできることも考えずにいる。だからこそ、著者は「絶望が足りない」「絶望の深さを知れ」と言う。そして、著者レベルで失望したときに、きっと私たちは動かざるを得ない心境になっているんだろう。それが、「絶望から出発しよう」の意味。「ヌルイ失望」さえ、おそらく感じきれていないだろう私。出発点に立つまでの道のりは遠い…。(真中智子)

あけましておめでとうございます。新しい一年がみなさまに健やかな日々をもたらしますようにお祈りいたします。

今年は、新年はどのように迎えられましたか？ お部屋の隅まで清らかにした方、お世話になった人に贈り物をした方、借金を返した方。節目を迎える時、私たちは心をすっきりと居ずまいを正し、新しい一年に敬意を表しているのかもしれないね。私も日本人の例にもれず、お正月を静かな心で迎えるのが好きです。

ただ、あれは5年前のこと。初めて中国の年越しを味わった時は、中国の人たちの新年を祝う熱さに触れ、心から愉快な気持ちになりました。

大みそかには花火をあげるらしい、ということは聞いていましたが、実際それは想像を絶する光景でした。圧巻ですよ。「すごい!!」と叫ぶ自分の声すら轟音にかき消されてしまいます。次から次へと休みなく火をつけられた花火が夜空を色どり、閃光が闇を薄めます。夜であることを忘れてしまうほどです。鼻には火薬のにおい、目には煙。五感はずっかり花火に占拠されます。

決して安くはない花火を、いい大人が楽しげに買い競う様子を目の当たりにし、これがあの数百円のためにエネルギーを傾け値切り交渉をする人たちののだろかと衝撃をうけました。一瞬のうちに消えゆく名もないエンターテイメントに、みな自分の夢をのせているかのようです。花火にかける意気込みを見たとき、そこに彼らの新年への想いを深く感じました。

農民画の絵の中の星も月も、すっかり花火に主役を奪われていますね。



「徐夕夜」(除夜) 赵龙观 上海(金山)

中国語で歌おう！会1月の歌 新年会で歌いましょう！

gùxiāng  
故乡

作词 高野辰之 作曲 岡野貞一

1. 曾追过野兔的那坐小山  
céng zhuī guò yětù de nà zuò xiǎoshān  
曾钓过鲫鱼的那条小河  
céng diào guò jìyú de nà tiáo xiǎohé  
在异乡至今也常常梦见  
zài yìxiāng zhìjīn yě chángcháng mèngjiàn  
永远也难忘怀我的故乡  
yǒngyuǎn yě nán wàng huái wǒ de gùxiāng
2. 起居饮食安否我的双亲  
qǐjū yǐnshí ān fǒu wǒ de shuāngqīn  
安然康乐是否我的知友  
ānrán kānglè shìfǒu wǒ de zhī yǒu  
风雨时雷鸣时每每挂牵  
fēngyǔ shí léimíng shí měiměi guàqiān  
梦寐以求的我的故乡  
mèngmèiyǐqiú dewǒ de gùxiāng
3. 当年我那多年的理想实现  
dāngnián wǒ nà duō nián de lǐxiǎng shíxiàn  
早晚将重归那美丽的家园  
zǎowǎn jiāng zhòngguī nà měi lì de jiāyuán  
山青青树油油我的故乡  
shān qīngqīng shù yóu yóu wǒ de gùxiāng  
水秀秀溪澄澄我的故乡  
shuǐ xiùxiù xī chéngchéng wǒ de gùxiāng

何度ケニアから「訃報」を聞いただろう。今年だけでも、10人くらいの訃報を聞いた。しかも、自分と同じくらいの歳や自分よりも若い、ずっと若い友人たちの訃報。中でも、先月聞いた突然の訃報は、悲しみも大きかった。

その彼とは、夫の実家のある村を初めて訊ねた日の夜に出会った。

家族や親戚への紹介が夜も更けて終わった後、懐中電灯を片手に夜道を歩いて送ってくれた。夫の同級生であったマイケル。長身で細身のモデルのようなスタイル。イギリス流の流暢な英語を話し、ユーモアに富み、笑顔がとても素敵だった。

私のケニア人の男性像(キクユ族に関して)は、「封建的」「自尊心が高い」「働き者」「議論好き」なのだが、マイケルはそれに加えて「レディーファースト」「ユーモアのセンス」「思いやりの心」を兼ね備えていた。初めて会ったその日も、暗い部屋のランプの明かりのもとでケニアの歴史、地域を発展させるにはどうしたらいいか、将来の夢など明け方まで話してくれた。あまりにも真摯に語るその姿に、ケニアの将来もこうした人がたくさんいれば心配ないのにと考えた。

ケニアの首都・ナイロビに外国人として滞在していると、「仲良くして、利用して儲けてやろう」という腹黒い人に出会うことも少なくない。そういう人ばかりに会っていると、「ケニア人は自分だけが儲ければいいのか、他の人や国はどうでもいいのか?」と疑いたくもなるのだが、こうしてマイケルのような青年の話を知っていると安心した。

彼はナイロビで大学卒業後、会計士の資格を取得し仕事を探していた。優秀で容姿端麗な彼はホテルの財務部で働き始めた。外国人観光客向けのホテルを転々とし、キャリアアップを図っていた。ケニアの大統領選挙のときは、地元に戻って選挙管理委員会のボランティアをするなど、自分の言葉通り「社会に貢献」してきた。

しかし時を経てお金を多く稼ぐようになった彼の周辺は、騒がしくなっていたようだ。女性問題、麻薬の売買問題、お金が絡んださまざまな問題を抱えるようになっていった。その後私は日本に帰り、彼のこ

とは風の便りに聞く程度になっていた。

そして彼の訃報を、会わなくなって6年目の今年聞いたのだ。

うわさによると、政治結社ムギキとよばれる団体に入り、政治活動をしていた最中に警察に捕まり銃で撃たれたという人もいれば、お金を持っていた彼は、麻薬の密売に関わって警察に銃で撃たれたと言う人もいる。うわさはうわさでしかないことも多い。しかし友人から伝わってくる最近の彼は、私がかつて知っていた彼ではなくなっていたようだ。

家族を持つこともなく、仕事で成功することもなく、社会活動もしたが自分が求めていた結果を出すこともできず、亡くなる直前のマイケルの生活はストレスの塊そのものだったという。彼の家族はその死をナイロビで同居していた友人から知らされて初めて知ったそうだが、国営テレビのニュースでは、

“two unidentified gang members were shot by police in Nairobi” (ナイロビでは、身元未確認の悪党団2人が警察によって射殺)

という見出しで流れていた。

私が出合った頃、彼の未来は前途洋々にみえた。しかし、その才能を開花させられず、その夢を実現することなく終わらせてしまうのは彼だけではない。ケニアと日本、同じ時代を生きる私たちではあるが、「ケニアは死がとても身近にある」ことを改めて痛感する。社会に希望が持てないケニアでは、あまりにも早すぎる別れが今後も続くのだろう。

### ‘わんりい’ おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。途中入会は、入会月によっては割引があります。詳細は事務局にお問合せを。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

今回はシンハラ人たちが長い議論の末に自警団を結成して、自衛の為に車で円陣を作り、食料を集めるために女性達を説得したものの相手にされなかったところで終わりました。

自警団が必要になる何事かが起きるわけも無く、男達が広場の周囲をウロウロしたり、一塊になって話をしたりしているうちに夜が明けてきました。明るくなるにつれて周囲の様子が判ってきます。ニワトリや何かの家畜の鳴き声らしき音も聞こえてきます。更に明るくなると人家と住民の姿がハッキリと見る事が出来る様になって来ました。僕は真夜中に男達が議論している間に周囲の探検を済ませていたので驚きませんでした。深いジャングルの中のキャンプに連れ込まれたと思い込んで怯えていた自警団の男達は、ジャングルというよりは木立のすぐ向こう側に何軒も人家があるのを見て驚いています。

こうなると、ほんの3～4時間前までの緊張感はありません。あれだけ長時間掛けてワイワイガヤガヤと議論をして組織したのに自警団はあっという間に自然消滅です。チェックポイントのゲートが開く8時までの間をただ待つばかりです。シャワーを浴びに行く人、車の中で仮眠を取る人など、漸く男達もリラックスする事が出来たようです。

7時を過ぎると待ち切れなくなった人達はキャンプを離れて、チェックポイントの方向に車を移動させてゲートの前で車列を作り始めました。ここパライのLTTEチェックポイントさえ抜ければ、あとは赤十字と政府軍のチェックポイントがあるだけです。政府軍のチェックポイントまでの約3kmを走り抜ければ政府軍の支配地域に入る事が出来ます。更に、ジャフナを中心地までは約30kmしかありません。LTTEキャンプに一泊した彼らからみれば僅か数十分の遅刻でLTTEのキャンプに無理矢理に連れ込まれたと思っているのでしょう。自分達が遅刻した事や、LTTEチ

ェックポイントの責任者は政府軍と交渉をしてくれた事なんか忘れて再び文句を言い始めています。

7時30分を過ぎるとゲートの周辺には完全武装のLTTEの兵士達が集まってきました。完全武装の兵士を見ても、最前線にいるという緊張感はありません。ジャフナが位置する半島は、ジャフナを巡る攻防戦で政府軍とLTTEが交互に半島を占拠しあい、双方で数万人の戦死者が出たと言われる激戦地でした。たぶん、休戦になる前のLTTE兵士達は必死の形相だったでしょう。しかし、休戦になった現在は兵士達の目付きが優しくなっているからだと思います。

ゲートの向こう側にはLTTE政府の直営バスが駐車しているのが見えます。既に大勢の通勤客らしい人達が乗車しています。バスに乗車している人達も、周辺を行き来している人達も、僕の目からはコロomboの街中にいる人達と同様に、優しい目付きをしている様に感じました。戦争が完全に終わったわけではありませんが、少なくとも休戦中には戦闘に巻き込まれて死ぬ事はないからでしょう。

8時になると先ずは書類審査です。事務所の中には昨夜の若い士官と数人の兵士が、飛行場の出国審査所の様な場所で待機していました。バンニの政府軍チェックポイントで発行してもらった通行許可書を見せると簡単に審査終了です。他の人達も全員が審査をパスしました。

後で聞いた話では、時間内にチェックポイントを通過した人は書類審査を受ける事無く、ゲートで停まる事も無しに通過できたそうです。書類審査を終えて外に出ると、既にゲートは開かれていました。各々が自分の車に乗り込むと我先にとゲートを通過して行きます。少し走ると赤十字のチェックポイントがありました。ゲートは開いているものの事務所には人気がありません。更に少し車を走らせると政府軍のチェックポイントに着きました。門番の兵士はいましたが、ゲートは開けっ放しで何の審査も無しで通過でき

ました。ここから先は政府軍の支配地域なので同行した二人の友人も安心したようです。

ところが、ジャフナに向かって車を走らせて行くうちに友人達の顔色が再び曇っていきました。道路沿いにあるほとんど全ての家屋は焼け落ちているか、焼け落ちていなくても壁やシャッターには無数の弾痕が刻まれています。

不思議な事に、LTTEの支配地域内では政府軍兵士の姿を見かけた事は全くありませんでしたが、政府軍の支配地域だというのにオートバイに乗ったLTTEの軍服を着た兵士達が沢山います。しかも、丸腰ではありません。実弾が装填されているか確かめる術はありませんが、機関銃を手にしています。こんな格好でチェックポイントを通過してきたのでしょうか。それともチェックポイント以外にもジャフナに入れるルートがあるのでしょうか。

こんな事で休戦協定が守られるのか不安です。今回はジャフナ市内の様子を書いて、このシリーズを終わる事にします。



チェックポイントのゲートを抜けたところの正面にあったLTTEの塹壕。兵士の姿は見えなかったが、銃口はゲート方向を睨んでいました。写真を撮ってから銃口に気がついたので冷や汗をかきました。左手に見えるのがLTTE政府の公共バス。

### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

## 松本杏花さんの俳句「余情残心」より

破魔矢手にバス乗合わす夫婦かな

shǒu chí qū mó jiàn  
手持驱魔箭

xiè hòu bā shì jī lèng rán  
邂逅巴士皆愕然

fū fù duì xiàoyán  
夫妇对笑颜



蜡梅的一枝がよろし備前壺

là méi tuō chén sú  
腊梅脱尘俗

yī zhī jìn xiǎn gāojié gǔ  
一枝尽显高洁骨

xiāng fǔ bèi qián hú  
相辅备前壺

季语：驱魔箭，新年。该物为日本新年的吉祥物、有能祛邪驱魔之说。

赏析：夫妇各自逛街访友、在公共汽车上偶遇、见对方也手持驱魔箭、不禁哑然失笑。

此句表现了夫妇二人‘心有灵犀一点通’的和谐关系、烘托出了新年的欢庆氛围。

季语：腊梅，冬。

赏析：备前为日本历史上旧国名之一、位于现在的冈山县东南部、烧窑而闻名。

骏马配好鞍。具有高洁傲骨的腊梅当然要辅以苍秀古雅的壶钵。花、壶相映成趣、尽显风流、反映出文人墨客的审美情调。

どうか今度こそ晴れてくれますように・・・私は心の中で祈り続けていた。前は曇り空だった為に見ることの出来なかった輝く湖の姿を、どうしてもどうしても見たかった。そして仲間はみんな引き返してしまったというのに、私がなかば強引に引き連れてきた二人にも、あの湖の本当の美しさを見せてあげたかったのだ。

しかし空の状態はあまり良くない方向に向かっているらしく、曇り空からは時折霧雨までパラついていた。

・・・神様お願い。私達が湖の畔にいる時だけでいいから、太陽の光を与えてください。

広東メンバーの二人は、仲間が皆高山病で動けなくなっていたというのに、既に高度順応している私と変わらない速さで山を登っていた。

「何かスポーツをしているの？」

スラリとした容姿の二人に問いかけてみたが

「いいえ、別に」と首を振った。

きっともともと強い身体なのだろう。

サリーと名乗った彼女は、優しくそうなボーイフレンドより少し年上の姐さん彼女のように見えた。しばらく一緒に行動しただけでキビキビとした決断力やサッパリとした気性が伝わってくるなかなかカッコいい女性だ。

いくら高度順応しているとはいえ、やはり4000メートルを越える地点での登山は苦しい。彼らにしてみれば尚更だろう。苦勞を共にしているうち、私達はすぐにお互いに親しみが感じられるようになってきていた。

「ほら見て！湖はあそこよ」

頂上にたどり着き、真っ青な湖が横たわる方向を私が指差したその時である。まるで神様が私の願いを聞き届けてくれたかのように、それまで空を覆っていた雲が切れ太陽の光が空から射し込んできた。雲の隙間から降りて来た光が地面を明るく照らしながらゆっくりと移動すると、光が湖に射し込んだその瞬間、静かに横たわっていた湖は私達の目の前で、まるで眠りから目覚めたようにメラメラと燃え上がるような水色に輝き始めたのだ。

「きゃあ～!! 見て！見て！」

私は悲鳴のような叫び声をあげた。やっぱりそうなのだ。この湖の色と輝きは普通じゃない。

三年前に眺めて以来忘れる事のできなくなっていた湖は、もしや年月を経て私の心の中で美化され過ぎているのではないかとの恐れも抱いていたが、やはり光をあびて輝いている乳牛奶海は、まるで湖の内側から光を放っているような輝きを持つ特別な湖なのだ。

「これなのよ！これをあなた達に見せたかったの!!」

サリー達は慌ててカメラを取り出すと、湖をバックに数枚の写真を写した。

しかし、感激の時間はこれで終わりだった。ほんの一瞬辺りを照らしていた太陽は、あっという間に再び雲の陰に姿を隠してしまい、二度と現れる事は無かったのだ。

ああ～・・・せめてもう少しの間、輝く牛奶海を眺めていたかったのに・・・。だが一瞬だけでも二人にこの湖の美しさを見せる事ができて本当に良かった。

「さあ、この上にももう一つ綺麗な湖があるから見に行きましょう」

二人を促し崖を登り始めたところでサリーの恋人が「アッ！」と小さく叫んだ。

「さっき写真を撮った時にサングラスを忘れてきたよ」

再び湖の畔に戻って探してはみたが、私達のいた正確な場所は判らなくなっていて見つけることは出来なかった。崩れ始めている天候の状態や山の麓で待たせている馬方達の事もあり、私達にはゆっくり探し物をする時間が無かったのだ。

先程までかけていたサングラスはスマートなデザインが施された物で、彼にはとても似合っていた。きっとお気に入りの品物だったのだろう。私は自分がこの場所に来たかったが為に道連れとして無理に連れて来てしまったような二人に対し、ちょっぴり責任のようなものを感じていた。

彼等がこの場に来たが為にガッカリするような事柄に遭遇するのは、私にとっても悲しい気分になるものだったが、サリーがその場の雰囲気振り切るように明るい声で言った。

「サングラスなんて新しいのを買えばいいだけじゃない！お金で済む問題なんて些細な事よ!!」

やっぱりサリーは気持ちの良い女性だ。

私達のショートトリップの中で最後の登りになる苦しい苦しい崖登りを終えた頃には、空を覆っていた雲が厚みを増してとうとう冷たい霧雨が本格的に降り始めてしまった。崖を登りきると見えてくる火山の火口のようなくぼみの底に青い水が濃淡のグラデーションで美しい模様を作っている五色湖が見える。暗い空の下で見ても、その深く澄んだ青い湖は美しかったが、やはり最高の状態を二人に見せられなかった事が私は残念で堪らなかった。霧雨に加えて冷たい風が吹きつけ、まともな雨具さえ持っていない二人は衣服が濡れて寒そうだ。

今日ここに彼らを連れてきたのは良かったのだろうか？美しい湖の姿も存分に見せる事ができず、辛い思いをさせた部分の方が大きかったのかもしれない・・・二人に対して申し訳ないような気持ちになりかけてきた時、ふいにサリーの彼が私の顔を見つめて言った。

「綺麗だね」

思わず彼の顔を見つめ返した私に、彼は続けて言った。

「本当に綺麗だ。素晴らしい景色だよ。ありがとう。君のおかげで僕達はここに来る事ができたよ」

心の中にも霧雨が降りそうだった私の気持ちが彼の言葉でパッと明るく照らされた気がした。

でも、これと同じセリフを此処で聞くのは二回目なんだけど……。一昨日、ウィンや学生達と来た時にも同じ場所で全く同じ言葉をかけて貰ったのだ。日本人の私が、中国で中国人の彼らにこんな風に感謝の言葉をかけて貰えるなんて変じゃない？ 思わず心の中で苦笑してしまったが、サリーの彼は続けて言った。

「だってそうだろう？ 僕達の仲間は6人のうち4人は体調を悪くして引き返してしまったんだ。君がいなければ当然僕らも彼らと一緒に戻ってしまったさ。君に逢えて僕達はラッキーだったよ」

「でも空が晴れている時ならばこの湖はもっともっと綺麗だったのに……。あなた達にも見て欲しかった。今回はとても残念だったけど、それを見るために私は絶対またこの場所に来るわ!!」

私の言葉に彼が言った。

「僕らも来るよ。また一緒に来よう！」

胸の中に暖かい気持ちが込み上げてきた。彼の言葉はこの場の気分で思わず口から出てしまったものである事は判っていたが、国籍の違う彼らと私の気持ちがこんな風に通じ合えた事がとても嬉しかった。

私達が出来る限り急いで洛絨牛場に戻った時には、待たせていた馬方達がものすごく不機嫌な顔で木陰に身を寄せている他には誰も居なくなっていた。

「全くどれだけ待たせたら気が済むんだ！ あんた達一人40元払うんだよ!!」

私達の顔を見たたん、顔を歪めて声をあげる馬方達に「ごめんなさいね」とサリーはサッサと120元支払うと財布を取り出そうとする私を制して言った。

「仲間が私達の荷物を持って稲城のホテルで待っているの。私達このまま真っ直ぐ自然保護区の入り口まで行ってタクシーに乗るけど、元子はどうするの？」

今日再び沖古寺に戻っても、既にやることは無いように思えた。宝石の湖はもう2回訪れたし、天候の状態も当期期待できそうにない様子だ。

「私も一緒に自然保護区を出るわ。そして今日は垂丁村に行く。」

私達は再び馬に跨って山を下り始めた。今度こそ洛絨牛場とはお別れだ。寂しさと天気の状態と、登山して歩き回った疲れとが重なって少し悲しい気持ちだった。しかも私の乗っている馬方はやたらに馬を叩くのだ。自分に乗せて歩いてくれる馬が可哀相で、馬方が鞭代わりに使っている木の棒を振り上げるたびに自分が叩かれているような気

分になってくる。

「やめて!! 馬を叩かないでよ!!」

私が声を張り上げても無表情な中年の男は聞く耳を持たない様子だ。馬に乗っていても全く楽しめず、垂丁との別れをしみじみ味わったりする気持ちにもなれない。あれほど再訪を熱望し恋焦がれてやってきた土地との別れをこんな風に迎えるのは惨めな気持ちだった。

今朝の管理人に見咎められ失敗に終わったモグリのトレックツアーで、「彼らは人間の言葉だって解るんだぜ」と愛情を込めて馬を撫でていた馬方青年の姿が頭に浮かんだ。彼らと一緒に行けたら良かったのにな……。再びそんな思いが頭をよぎったが、今日の天気の事を思い返せばやはり中止になって正解だったのだろう。

沖古寺で自分の荷物を運び出し、垂丁の入り口まで行った。

こんなに辺鄙な場所で都合良く帰りのタクシーなど捕まるのだろうかと思っていたが、そこには山を降りてくる観光客を待ち構えているタクシーが数台止まっていた。

「稲城までだろ!! 200元だ」

数台を当たってみたが、どのタクシーの値段も同じようなものだ。適当な一台と200円で交渉がまとまると、サリーは私を辺鄙な田舎に一人残して行く事が心配な様子で、何度も「私達と一緒に稲城へ行きましょうよ」と誘ってくれた。

一緒に過ごした時間は短かったが、私もサリーとその彼氏にはどこか気持ちの通じ合うものを感じられ、すっかり彼らの事が好きになっていたのだから別れるのは寂しく感じたが、垂丁村は今回の旅の中でも是非訪れたいと思っていた場所だし、数日前に偶然再会できた垂丁の少年にも村に来るよう誘われていた。あの時は時間が無くてゆっくり話も出来なかった。私はどうしてももう一度彼に会いたかったのだ。

「ありがとう。でも垂丁村に友達を探しに行きたいの。私は大丈夫だから心配しないで」

どちらにしろ方向は同じだったので、途中までタクシーに同乗させてもらう事にした。

私達が車に乗り込み出発を待っていると、別のタクシーと話をしていた一目で学生とわかる若い中国人旅行者の二人組みが私達のタクシーの窓を叩き声をかけて来た。

「俺達稲城まで行きたいんだけど、同乗させてくれませんか？ あっちのタクシーに尋ねたら偉く高い事言うんで、人数増やして割り勘にしたいんです」

彼らの言葉に異論のあるはずも無く、サリー達も喜んだ。

「やった！ これでタクシー代が安くなるわ！」

ところがである。席を外していたタクシー運転手が戻ってきてその話を聞くと、若い青年達に言ったのだ。

「こっちに乗るのはいいが、料金はお前ら二人分で200元だぜ」

「はぁ～!？」

私達全員、ドライバーの理不尽さがめつさに呆れて声をあげた。血気盛んな若者達と同じく年若いドライバーはその場で激しく口論を始め、私とサリー達はお互いに顔を見合わせたため息をついた。全くこの人間と来たら、最後の最後までこんな気分を味わせてくれる訳か・・・。

「もう嫌。私この人間嫌いだよ！」

私が小声で囁くとサリーの彼が顔を歪めながら小さく頷いた。

「彼等は学生でお金が無いんだから、ちょっとまけてあげなさいよ」とドライバーをとりなそうとしたサリーの努力も報われず、激しい口論の末に学生達が去っていき、

「あいつらを乗せたら、向こうのタクシーの客を取っちゃう事になるから俺は遠慮しただけさ」

気性の荒そうな若いドライバーは、喧嘩の興奮が納まらない口調で言い訳のように何度も繰り返していたが、そんな話は私達には全く関係ないし、すっかり不愉快になった気分はそう簡単に消えるものではない。全くこの人間は何でも金、金、金だ。私は心底うんざりしていたが、大人のサリーは「はいはい、そうよね。あなたの気持ち良く解るわ」と口を合わせてドライバーをなだめていた。本当に頼りになるお姉さんという感じた。彼氏は良い彼女がいて幸せだろうな・・・。

車は走り出すと急な坂を登り始め、2キロ程登ったところで道路の両脇に小さなチベット式の住居がかたまって建っている場所が見えてきた。「ここが垂丁村だぜ」ドライバーが言った。

夕暮れ時の村は丁度仕事から戻ってきた人間達で活気づいている様子だ。家の煙突からは煙があがり、村の子供達が道路わきで遊んでいた。庭では放し飼いにされているニワトリ達が歩き回り、村はずれの畑では金色の麦穂が美しく波打っている。それまで沈んでいた私の気持ちがこの風景を見て急に波立ってきた。管理人のうろつく自然保護区のがめつい宿なんかより、ここの方がずっと楽しそうな場所じゃない!!

車をゆっくり走らせながら宿を探し、村のはずれの方にある小さな家の前で尋ねると、ウチは宿屋をやってるんだと答えた。初老のおじさんは優しくそうに見えたとし、尋ねた宿代も20元と安価だったのでそこに決めた。

サリーはまだ心配そうに、

「本当にこんな所で一人で泊まるつもり？ 私達と一緒に稲城に戻った方がいいじゃない!!」

と言ってくれたが、私はお礼を言い二人と握手してお別れた。車を降りると再び一人きりだが、全く不安は感じなかった。

「さあ、これから垂丁の旅、第二部が始まるよ」

私は夕暮れの村を見渡すと、自分に向かってそう呟いた。

(次号に続く)

## ‘わんりい’ 特別企画!

中国笙の<sup>チェンタンハオ</sup>銭騰浩さんと

打楽器、中国木琴の<sup>マービン</sup>馬平さん、

お二人の演奏と漢詩で楽しむ

### ♪♪♪ 春節ミニコンサート ♪♪♪

乃平庵自慢の手作り野菜たっぷりの健康的で美味しいランチ弁当付き

◆ 2010年2月14日(日)

◆ 12:00 ~ 15:00

- ▲ 2月10日の週間天気予報で、悪天候予報の時は、お申込みの方全員に連絡の上、4月中旬に変更しす。
- ▲ キャンセルは2月10日までとします。

### 会場：野津田の隠れ里・乃平庵

(<http://noheian.hp.infoseek.co.jp/>)

〒195-0063 町田市野津田町1597-4

神奈中バス・野津田車庫より徒歩15分  
申し込まれた方には詳細地図をお送りします。

- ▲ 参加費：3,000円 (乃平庵・健康ランチ弁当付)
- ▲ 定員：先着20名  
20名を越えた場合はランチ弁当なしで若干名/2,000円

### ▲ 当日のスケジュール

◇ 12:00 ~ ランチタイム

美味しい健康的なランチ弁当を頂きながら演奏のお二人を交えての歓談タイム

◇ 13:30 ~ 15:00 演奏タイム

### ▲ 演奏予定曲：

<sup>チェンタンハオ</sup>銭騰浩さん「沂蒙新貌」、「草原騎兵」他

<sup>マービン</sup>馬平さん「天山の春」、「喜相逢」他

その他、お二人で漢詩や吹打曲など盛り沢山

### ▲ 申込：

メール：[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)

TEL/FAX：042-734-5100 (わんりい)

国際支援と友好活動を続けている、町田市の国際ボランティア10団体が、援助を必要としている世界中の子どもたちにプレゼントを上げたいと「(財)町田市文化国際交流財団」の後援を得、「町田ターミナル周辺活性化協議会」との共催で、“世界中の子ども達にサンタを”実行委員会を結成し、初めてのクリスマスライブを開催すると共に支援国の民芸品などを販売しました。

ライブは今回の催しの趣旨に賛同下さった、夢広場にも出場の山下孝之さん(ケーナ)、ゲンセキさん(オカリナ)、モスキートさん(現代音楽)ら、まだ20代の若者世代と、TOKYO万馬/馬頭琴アンサンブルの団長の永瀬正博さん(馬頭琴)、「魔法の手」(手話ダンス)、「レインボーチルドレン」さん(ダンスと合唱)たちが温かな心をいっぱい盛り込んだ楽しい内容でした。

12月という季節柄天気が心配でしたが、幸い晴天に恵まれて一安心ひとしました。ただ、町田の目抜き通りに面しながら、東急ハンズ町田店の引越で2年ほど前、聞き慣れない名称になってしまった会場で、しかも12月、屋根はあっても風が抜けて寒いこともありライブのために用意の椅子は空席もありましたが、魔法の手さんの手話ダンスやレインボーチルドレンの皆さんのダンスの時は、見ている人も参加団体のメンバー達も一緒に身体を動かしながらライブを楽しみました。

今年11月1日(日)に開催した「町田発国際ボランティア祭・夢広場」は既に12年間継続し、参加団体の年齢も高くなり少々新しい風を呼び込みたいと感じたりします。今回のクリスマスライブのように若い人たちと世代を越えて協力し合い活動できたことは、夢広場の活性化のためにも一つの指針になるでしょう。また夢広場に引き続き、ボランティアのお手伝いに大学生や高校生の参加もあり、寒い中本当に有難いことでした。

'わんりい'は、11月号で紹介しましたように、ラオスの山中にあるモン族の村・シヴィライ村の女性達が一針一針心を込めて刺繍を施した美しいポシェットやお財布、小袋等や'わんりい'でお馴染みアフリカンコネクションの品物を預かって販売し、それぞれの団体の支援活動に協力しました。

特に今回販売の刺繍小物は、「ラオス・山の子ども



キーボードを操作しながらケーナを演奏の山下孝之さん



サンタの帽子をかぶってスタンバイの'わんりい'メンバー達

文庫基金」を立ち上げ、ラオスの山中にあるモン族の村・シヴィライ村に子どもたちの図書館を建設した安井清子さんが、その図書館維持や管理の指導などで同村を訪れ滞在した折などに、生活支援のためにと引き受けてきた作品です。安井さんが一つ一つ吟味し厳選して持参した刺繍作品だけにどれもこれも甲乙つけ難く、見るほどに美しい出来栄で、購入を決めた皆さん達もどれにするか迷いながら選択を楽しんでいました。

ラオスの刺繍小物の売り上げは思った以上に好調でした。が、実は売り手の我々が、安井さんの人柄や活動を良く知っていることもあって、並べられた刺繍小物達に「買って、買って」と呼びかけられているような気持ちになり、「これはあの人にあげたい」などと、身内での購入も結構ありでした。又、呼びかけに応じてお出掛けくださった'わんりい'のメンバーも多数あり、深くお礼を申し上げます。

(田井記)

初めて参加の人も、羊肉苦手という人も感動！  
本場仕込みの、美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)食べ放題！

♪ 2010 'わんりい' 新年会へようこそ ♪

於：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)  
2010年1月31日(日) 11:00～14:00

- 定員：先着40名('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円(会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100
- 新年会メニュー：1.ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」囲んで歓談  
2.ビンゴ 3.お笑い福引 4.他



2009年度アジアの茶店(参加無料)是非、参加を！

<http://prw.kyodonews.jp/open/release.do?r=200912086574>  
[http://www.wako.ac.jp/what\\_new/2009/2009-1217-1031-59.html](http://www.wako.ac.jp/what_new/2009/2009-1217-1031-59.html)

ドキュメンタリー映画・上映&トーク

「指紋押捺拒否」1984年制作、50分

オドクス 呉徳洙(1998～2008和光大学兼任教員歴任)監督作品、  
特別ゲスト：辛仁夏(本作品主人公)

- ◇ 1980年代、多くの在日外国人が指紋を押さないと決意。当時16歳の少女・辛仁夏さんと、その人権運動の展開。
- ◇ 上映後、呉監督と辛さんのトーク
- ◇ 「上映会とトーク」終了後、卒業生による有機野菜の仕出し屋「春夏秋冬」の食事を頂きながら呉監督と映画主人公・辛仁夏さんを囲む懇親会あり。(無料/事前申込み不要)
- ◆ 2010年1月13日(水) 18:00～20:00
- ◆ 会場：和光大学J棟 401室  
参加無料、事前申込み不要、
- ◆ 懇親会：20:00～21:00  
場所：和光大学梅根記念図書・情報館1F会議室  
主催：和光大学国際交流センター・異文化交流室  
問合せ：和光大学教学支援室 ☎044-989-7487(担当：明石)

NPO法人あい・友チャリティーコンサート

『伝統を今に伝える』～姜小青の世界～

[http://www.kcf.or.jp/tiara/schedule\\_detail\\_201001.html#22](http://www.kcf.or.jp/tiara/schedule_detail_201001.html#22)

1月22日(金)開演:18:00開演(17:00開場)

於：ティアラこうとう <http://www.kcf.or.jp/tiara/>

(江東公会堂小ホール 東京都江東区住吉2-28-36)

共演者：西本梨江(ピアノ)馬平(中国木琴&打楽器)

参加費：3,000円(前売)全席自由席(当日：3,500円)

主催：NPO法人あい・友

お問い合わせ：03-3485-1793

【1月の定例会】1月18日(月) 13:30～

- ◆ 於：田井宅 新年会の打ち合わせをします。尚、2月号のおたよりはお休みです。

中国伝統演劇の見方と楽しみ方

京劇・変面・雑技

変面の第一人者・周洪武(国家第一級俳優)が出演！

<http://kokubunjizumi.typepad.jp/main/cat3088150/index.html>

2010年1月23日(土)、19:00・開場18:30

- 於：国分寺市立いずみホール  
〒185-0024 東京都国分寺市泉町3-36-12  
JR中央線・武蔵野線西国分寺駅南口より徒歩1分  
2,000円(全席自由席)
- 問合せ：張紹成友の会 TEL/FAX042-382-7367
- 主催：国分寺市立いずみホール  
<http://kokubunjizumi.typepad.jp/>

国分寺市立いずみホール主催

中国伝統演劇の見方と楽しみ方

京劇・変面・雑技

- ◆ 日時：1月23日(土) 19時開演
- ◆ 場所：国分寺市立いずみホール
- ◆ 開演時間：18時30分開場 19時開演
- ◆ 入場料：2000円
- ◆ 全席自由席(370席)



女優登場！《新潮劇院 京劇》<http://www.shincyo.com/>

『楊家将演義』……穆柯寨・穆天王・頼門斬子

出演：張桂琴 張春祥 他

1月31日(日) 16:00開演(全席指定・字幕付き)

- ◆ 於：成城ホール <http://seijohall.jp/>  
小田急線「成城学園前」駅 徒歩4分  
一般：4,300円、世田谷区民：3,800円  
高校生以下：2,000円 ※当日券は各500円増

◆ 作・演出：張春祥 ◆ 企画・制作：新潮劇院

◆ 後援：中国大使館文化部／世田谷区

◆ 問合せ：新潮劇院  
TEL/FAX:03-3484-6248

- ◆ チケットのお申し込み  
[ticket@shincyo.com](mailto:ticket@shincyo.com)  
☎080-3486-3352(梅木)

